

---

# 鏡の子。

麻倉 ヒトミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鏡の子。

### 【コード】

N2003G

### 【作者名】

麻倉 ヒトミ

### 【あらすじ】

男の子と女の子が鏡について会話している話。ジャンルは何になるんでしょう…。

「中村!」

「うるせーよ。何?」

「中村って鏡見たことある?」

「...」

沢岡は変な男の子です。

ぱーぷりんな頭をしています。

ぱーぷりん ってなんだろうと思うのですが、

これが彼を表すのに一番適当な言葉です。

彼の頭は異世界につながっている。

ひたすら常人では気にしなさそうな事ばかり気に向け、

私に意見を求めるのです。

ある日は火星人の存在。

ある日はカツラの使用例。

今日は何でしょうか。

「中村?聞いてる?」

「…うん。あるよ。鏡位」

「マジで!?!」

「うん。沢岡は見ないの? 洗顔した後とか」

「そう!?!そこだよ!?!」

どこだよ。

「昨日顔洗ってたらさ、鏡あつたの。前方に。んで、それが視界に入ってたんだよ。」

そうしたら、俺の顔べっちゃべちなわけ」

「洗顔したからね」

「そう。顔洗ったからなんだよ。だからべちゃべちなよ。でもさ、だから!なんだよ!?!」

「だからだから?」

「俺は顔洗ったからべちゃべちなよ。そして、それを知っているから顔のべちゃべちゃ感も納得できるんだよ。わかる?」

「うん。べちゃべちゃだろうね」

「んで、更にコレ!」

「ニキビ?」

沢岡の左の頬あたりに小さなニキビ。  
彼の細い指はそれを指していました。

…さつきからコイツ何してるんだらう。  
ギャグかな。

否。目はマジだ。超真剣だ。

「これは、俺が鏡を見ないと発見は不可能だ。または痛みを発する  
か」

「気づかずに引つかくと痛いな」

「でしょ？このニキビも、顔のべちゃべちゃも、鏡を見ないとわか  
らない。

でもさ、中村。君はどうして鏡を信頼できる？」

「・・・沢岡は鏡に信頼を求めているの？」

「俺が思うかは別だよ。でもさ、鏡が無いと自分の顔はわからない。  
でも。その鏡が本物をうつしていると誰が保障できるのかな？」

俺の顔を知っているのは、他人だけで、俺自身はわからないんだよ。  
だって鏡は真実かどうかわからない。真実じゃないかもしれない。

俺は、まあ正直なところ不細工でも作りが良いわけでもないと思う

よ。

でもそれは俺が鏡を見てそう思っているだけで、  
本当は吐きたくなるくらいの不細工かもしれないし、  
中村が性欲を抑えきれない程の魅力ある顔立ちかもしれない。  
もしかしたら人の顔じゃないかも！宇宙人？人面犬？怖いな！」

「怖いね。」

人面犬は人の顔じゃないだろうか。

「あ！！中村は大丈夫だよ。すごく綺麗な顔の作りしてる。俺が保障するよ。」

「こんな特徴の無い顔が好きなの？」

中村さん（私の顔）は綺麗ではありません。  
整ってはいますが、整っているだけです。

瞳・鼻・眉・口等の形、大きさ  
どれをとっても普通で、印象がありません。

何の特徴も、何にも、無い顔です。

「こんなって・・・中村。中村はあれだ。ミラーマジックにやられているよ！」

中村が見ているのは中村の顔じゃない！偽者だ！！！」

「ええ〜偽者言われたよ。」

「そんなって表現する時点で中村はやられている!」

「ってかさっきから中村中村うるさいよ」

「中村さん」

「黙れ。」

「だってさぁ・・・中む・・・。お前はどつなの？」

「ってか俺はどうすればいい?鏡に信頼できなくなっちゃったよ。」

「ヤツと今まで通りに付き合つには時間が掛かるよ!」

「中村とデートする時にサイ 人みたいな髪だったらどうしよ!」

「惚れる。」

「マジで!!!俺、サイ 人になろうかな!」

「沢岡は変な男の子です。」

「変な男の子ですが、顔立ちはとても綺麗なのです。」

「(中途半端な私と違って)」

「男の子にしては大きな瞳。」

「少しぺちゃんとした鼻。」

「でも、彼は鏡との信頼関係が崩壊状態にあるので」

「今の顔を信用できないみたいです。」

「難儀だ。」

「…沢岡。アタシにいい考えがあるよ」

「え。何？」

「とりあえず、鏡とは信頼関係が築けるように努めろ。」

「一度壊れた関係は戻りにくいよ！」

「時間かかってもいいから。信頼関係が元に戻るまで、アタシがあんたの顔とか髪型見てあげるよ。これでいい？」

「マジ?!ならいいや。中村なら信用できる。ああよかった」

「軽いな。」

「うん。でもこれで安心だよ。ありがとう」

沢岡が顔をほころばせました。  
ふわって笑顔。

大きな瞳は細められて  
とても可愛らしい笑顔。

鏡にうつっていないから沢岡にはわからないだろう笑顔。



・・・あ、関係が崩壊しているからうつつても無意味か。

沢岡が信頼できない鏡のかわりにしばらく鏡をやることになりました。

沢岡が鏡と和解しても、

その笑顔が素敵だって事を理解しないだろうけど。

私が理解していればいいだけのこともしれません。

だって私は

彼を判断する

彼の鏡。

(後書き)

私が実際思った事です。

鏡は真実か？

それを軽いノリでやってみました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2003g/>

---

鏡の子。

2011年10月5日20時10分発行